

---

And I still want

ふるーつ

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

And I still want

### 【Zコード】

Z0803

### 【作者名】

ふるーつ

### 【あらすじ】

とある夢から始まる物語。ある少女の、周囲の人間たちを巻き込んで明かされる秘密とは？

初のオリジナル小説です。ファンタジーが好きでない人はスルー推奨。

1 夢（前書き）

いきなり本題に入っていますが、あまり長い話じゃありません。だ  
いたい10話前後で終わると思ってお読み下さい。

ここは草原か、もしくは花畠か。

草が茂り、色とりどりの花が咲き乱れている。その向こうに建物があるように見えるが、どうもぼやけてはつきりしない。ティアスは、腰あたりまでそれに埋もれながら、ぼんやりと辺りを見渡していた。

と、誰かがティアスの手を取った。

見覚えのある少女だ。ウェーブがかつた黒髪が風になびいてきれいに揺れている。

少女がティアスを連れていく。どこへ？　いや、誰の元へ？

疑問に思いながらも、ティアスにはそれがわかつている気がした。

……そう、きっとあの人のところへ。

その人は、幼いティアスと少女の前でかがみこんだ。微笑んで頭をなでる。ティアスは、少女と顔を合わせてはにかむように笑った。しかし次の瞬間、目の前が真っ赤に染まった。

その人は、全身血まみれになつて倒れこんだ。ティアスの視界をあちこちから染める、赤、赤、赤。耳をつんざく悲鳴。叫んでいるのは少女だけではない、ティアス自身も我を忘れた。

いや、いや、どうして、どうして、どうして　！！

目が覚めると、もう朝日がさしていた。いやに鼓動が早い。

「あら、お目覚めですか？珍しいですね」

部屋に入ってきたセディの姿に、ようやく本当に目覚めた気がした。長いことこの家にいる精霊は、慣れた様子でせつせとベッドを片付けていく。

「フレア様が、朝食の支度をしてお待ちですよ」

「……はいはい。すぐ行くから」

いつもよりかなり余裕のある返事をして、ティアスは部屋を出た。

階段を下りながら、ぼんやりと考える。

あの夢は……。

夢に出てきた少女。どこかで会っている気がする。けれど思い出せない。……あれ？そもそも瞳の色はどんなだっけ？…さつきまで見ていた夢なのに。

「どうしたの？」

薄茶色の髪が落ちる肩に手を置いて、ティアスの顔をのぞきこんだのは母フレアだった。

「そーで。お寝坊さんのティーがちやんと起きてくれるなんて。明日は嵐かな？」

レージがからかうようにならひのを視界から遮るように、ティアスはそっぽを向いた。

「ちょっと変な夢みて日が覚めちゃっただけだよ」

「変な夢？」

ティアスは夢のことをかいづまんと話した。レージはもつ興味を失つたようすで、朝食に戻っている。

「あの子……どうかで会つた事あると感づうんだけど」

「……」

なぜかショックを受けたようだつたフレアの表情は、ティアスの声で元に戻つた。

「…あ、いえ。何でもないわ。じゃあ、ご飯食べて行つてらっしゃい」

いつもの「母の顔」に戻つたフレアに何となく違和感を感じながらも、ティアスは学校へと出かけた。姉レージと弟フォーセットも家を出る。フォーセットとは行き先は同じ学校だが、お互い友人に会つため、別方向となつた。

家に残つたフレアと精霊たちの表情は、強張つていた。

「フレア様……」

シティが物憂げに、子供たちが向かつたほうを見遣る。

「ええ……まざいわね。10年たつて、術が弱まつてきているみたい」

「今夜にでも、かけ直しますか？私もお手伝いいたしますが」

「いえ 少し待つて」

「え？」と、シティともう1人の精霊 セティがフレアを振り返つた。

「もしかしたら……もしかしたら、私がずっと待ち望んでいたことが叶うかもしね。…もうしばらく、様子を見たいの。協力してくれる？」

葛藤が垣間見えるフレアの表情に、精霊たちは返す言葉もなく、しかし怪訝そうにその双眸を見つめた。

## 1 夢（後書き）

海外から帰国して心機一転、初のオリジナル小説を投稿することにしました。とはいっても、ストーリーは5年ぐらい（もつとかも？）前に考えたものなので、設定とか細かい部分で無理があるかもしれません（汗）。

「コレ変じやね？」とか思つたらちゃんと指摘して下されば、修正できる部分は修正したいと考えています。

あと、初めての方へ。私のこれまでの投稿作は全て一次創作です。

キイン、ガツ！ カツ、ガキッ！

高い金属音が響く。時には、わずかな火花と共に。2人を中心にはや遠巻きの人垣ができるが、もはや2人の脳裏にはない。幾度かの鍔迫り合いのあと、ティアスはいなした剣の勢いそのままに相手の側面に回りこんだ。

「 つ！？」

そのまま相手の手元から剣を弾きとばし、ティアスはその喉元に切つ先を突きつけた。相手の少年 プロードは一瞬だけ呆気にとられたが、すぐに身体から力を抜いた。

「 降参」

そのまま相手の手元から剣を弾きとばし、ティアスはその喉元に切つ先を突きつけた。相手の少年 プロードは一瞬だけ呆気にとられたが、すぐに身体から力を抜いた。

「 ……お前つて、ほんとに剣さばき上手いよな。俺だつて毎日練習してるのに」

「 私だつて練習してるわよ。1週間前の腕前と同じだと思つてるから負けるのよ」

負け惜しみにしては清々しい台詞を、ティアスは朗らかに返す。実際、同じ学年でティアスに剣術で勝てる人間はそつそういなかつた。

そのとき、クラス終了の鐘が、丁度良いタイミングで鳴り響いた。

「 ほんと、ティーは剣術はピカイチだな。さつすが、おばさんと姉さんが『ツイスト』だけあるな」

「ありがと」

お昼時。ティアスはロイリーと昼食をとっていた。この学校には食堂もあるのだが、芝生の上に持つてきたランチボックスを広げるのがティアスは好きだった。

「あ、でもロイの『ご両親も王宮勤めはしてたんだよね?』

瞬間、ロイリーの顔が心なしか強張ったように見えた。

「知らねえよ。顔も覚えてねーんだから。いいよ、今の生活でオレは満足してっから」

付け加えておくが、ロイリーの性別は女だ。

王宮勤めをしていたロイリーの両親は、彼女が生まれてすぐに亡くなつたらしく、今は親戚筋の人と暮らしているんだそうだ。……ロイリーが傍から見れば男としか思えない言葉遣いであることとの関連は、ティアスにとつては永遠の謎だが。

食事を終えたのは、2人ほぼ同時だつた。

「さて、じゃあ約束な」

「え?…ああ、どっち先にする?」

「先に教えてやるよ。ティーは記憶するつてのがほんとに苦手だもんな?後で、ゆつくり剣教えてくれよ」

運動神経の鈍いロイリーが得意の歴史を、暗記が苦手なティアスが自慢の剣術をお互い教えあうのは、ふたりの日常だつた。

「……そういうやさ」

「何?」

「ティーは、そんなに剣術鍛えてどうすんだ?」

ランチボックスを行儀悪く肩に抱えたロイリーが尋ねる。

「うーん……レージみたいに『ツイスト』とまではいかないけど、王宮の関係で剣が使えるところに入りたいな」

「そつか。ティーは筋もいいみてーだし、お姉さんみたいに優秀な剣士になれそうだよな」

「ありがと」

ティアスははにかみつつ微笑んだ。

## 2 日常（後書き）

次の話は午後に投稿できる・・・と思います。  
謎の言葉の意味はその話の中で。

### 3 始まり（前書き）

ここから本題に入ります。

### 3 始まり

王宮で、王子の誕生パーティーが開かれる。

その情報をティアスがゲットできたのは、姉であるレージが『ツイスト』だったからだ。

『ツイスト』は王宮の四方を守る門番。國中から剣術、魔術の技量を認められた者がその職務につく。レージはこの春になつたばかりだが、その昔『ツイスト』だった母フレアの遺伝<sup>じょくねん</sup>なのか、年齢としては最年少に近い。友人知人の間でも、将来を嘱望<sup>じょくぼう</sup>されている。

名譽職でもあるので希望者は多いが、『ツイスト』が羨望の眼差しを送られるのはそれだけではない。王族の誕生パーティーに出席を許されるのは、『ツイスト』とその家族だけなのだ。どうしてなのかと問われると、多分誰しも首をひねるだろう。昔からそうだから、としか答えようがないのが大方の人間だ。それは『ツイスト』経験者にしても同じで、ティアスは今まで答えられる人物に会つた事がない。

「終わるまで、友達に言つちゃダメよ。ロイリーさんにも。絶対ねパーティの日取りを告げる使いを返したあとで、フレアはティアスに念を押した。

「わかつてるよ」

内心呆れつつティアスは応じた。そんな、どんな言い方をしても高慢にしかならない話、雑談の種にもならない。

：：：とはい、これはパーティの保安のためだろ？と思われた。会場内はいい。たとえドレスアップしていようが、『ツイスト』たちならどんな輩がいても返り討ちにする。しかし、パーティの夜は警備は手薄になる。治安の悪い国ではないが、不届き者はどこにでもいるものだ。

「なあ、そういうあの人人は来るのか？」

フォーセットが、ふと思いついた様子でレージに尋ねる。

「あの……『シルス様』」

数瞬、一同そろつて固まつた気がした。まつ毛きに自己解凍したレージが首をひねる。

「ん……彼女、気まぐれつて話だからなあ。あたしも、会つたことはないんだよね。なんでも、いつつも城の片隅に閉じこもつて全然出てこないらしくて」

「え？ 姿見たこともないの？……死んじゃつてたりしないよね？」

「こないだ見たつて人がいたらしいから、とりあえず大丈夫だと思うけど。……というか、本当に王の隠し子とかじやないかつて時々思つよ」

王族「らしい」人物について失礼千万だが、レージを責める人間はこの場にはいない。

その名は知つてゐるが、身元はさっぱりわからない通称『王族』

それが『シルス』という存在だった。そもそも、どうして「その人物が王族といわれるか」も、「その存在だけが公になつてゐるか」も不明なのだ。とりあえず「性別は女」ぐらいの情報しか仕入れられる者はいないし、仕入れる気もない。「王の隠し子ではないか」なんていう話もあるにはあるが、いかんせんデータがなさすぎる。

ティアスがその話を知つたのがすでに何年も前の話なのだが、どうも「彼女」の人間性がわかるようなエピソードもない。かつて『ツイスト』だつたフレアも、彼女のこととは知らないと言つていた。

「はいはい、噂話はそこまで。パーティには正装して行かなきやいけないんだから、ちゃんと準備しなきやね。楽しみでしよう、王妃様にお会いするのは」

少々強引な母の割り込みで立ち消えになつたその話を、その後、

家族間ですることはなかった。

話に割り込む寸前、フレアの表情がひどく歪んだことも、  
気付く者はいなかった。

### 3 始まり（後書き）

これ書きながら自分がかつて書いた文章を見直してると、結構粗があるもんだ。

この回の文章は半分ぐらい書き替えました。青いな自分。

とはいって、設定の部分は自分で定着していたりするので、粗とか見つけづらいですねー多分。  
感想など頂けたら嬉しいです。

初めて目にする王宮の城門を前に、ティアスもフォーセットも少しばかり緊張していた。

ただの、姉たちへの慰労を兼ねたパーティーではあるが、やっぱり滅多に拝めない王族とじかに対面するというのは、いささか緊張するものである。

そんな子供たちの様子を視界の端にとらえながら、フレアは「行くわよ」と簡単に声をかけると、ひとつ息をついた。

衛兵に、フレアは青いビー玉を差し出した。玉が淡く光ったかと思うと、次の瞬間には玉に封印されていたセディが姿を現した。その精靈をとつくりと見つめ、衛兵の表情が少しゆるんだ。

「結構です」

「この精靈が、入場できる証となる。

『ツイスト』は任命されると同時に、各自精靈を『えられる。そして、パーティーの通知を受け取つた者の精靈だけが、「正規招待者とその同伴者であること」を証明することができる。

この方式は昔から適用されているようで、シティもかつてはオレンジ色のビー玉を使つたらしい。

小物入れにはそのほかに、古そうな別のビー玉もあつたような気がしたが、フレアが話題にしないので、『氣のせいだつたらしい』。

実際、ティアスはよく知らなかつた。精靈が『えられるのは、『ツイスト』だけではない事を。

会場には、すでに招待者のほとんどが集まつてゐるようだつた。おそらく『ツイスト』本人の人数こそ大したものではないが、その大半が連れている同伴者を含めると、結構な人数だ。誰も彼もが思いの正装に身を包み、立食パーティーを楽しんでゐる。

「……うつわー。」れじや、『ツイスト』本人が誰かも、よくわからぬないね

「……だな。レージだつて、よつほど親しい奴じゃないとわからないんじやねーか?」

感嘆の声をあげる妹と弟に、レージは苦笑しつつ無言を通した。

パーティーに決まったプログラムはなによつだつた。同余もおらず、優雅なBGMと上品な料理が雰囲気を演出していた。そして、ティアスたちが到着して少しすると、会場内が一気に沸いた。

王家の登場だ。

「王子!」

「ヘルド様ー!」

「王子、おめでとうござります!」

歓声や賛辞の言葉が、あちこちから沸きあがる。両親に連れられて現れたその少年は、まだ幼さの残る顔をわずかに染めて、はにかむように笑つた。

口を開いたのは、王妃だつた。

「皆さん、今日はよくいらっしゃいました。将来この国を背負つて立つべきわが息子も、今日で9つとなりました。皆さん、日頃の活躍のお陰です。これからも、わが王家を引き立てていって下さいね」

彼女の挨拶のあいだ、傍らの王は穏やかに会場内を眺めていた。挨拶はそれだけで、あとはパーティーを楽しむ参加者のもとへ、王家の面々が訪ねていた。

「……あれ? ねえレージ、お母さんは?」

「ん? そういうえば、さつきからいないわね。まあ、多分トイレでしよ」

ティアスの言葉に一瞬だけ怪訝そうな顔をしたレージだが、すぐに友人との歓談に戻つてしまつた。薄情にも見えるが、レージは母

を信頼しているのだ。人格面でも護身の面でも。

一応探してみようと会場を離れ、喧騒が届かなくなつた通路を歩いていたティアスは、窓際に何かいることに気付いた。

ウェーブがかつた長い黒髪の頭の部分を結い、上品なドレスに身を包んだ少女。

まさか と、ティアスは内心でつぶやいた。

(……『シルス様』?)

彼女は壁にもたれて眠つている様子だつた。少し濃い眉、標準的な体つき。とりあえず「可愛らしい」範疇に入るだろう少女。

「あの、……どうしたんですか?」

声をかけながら肩に手を置く。すると、弾かれたように少女は唸りだした。

「…………」

「え? あ、あのつ……具合悪いんですか? 誰か……」

「大丈夫……ウイルトン、いつもの…だ、から……」

喋つてくれたと思つたら、どうも人違いされているらしい。しかし顔を上げてティアスと認めた彼女は、そのまま凍りついたようになに言葉を失つた。

「…………」

「…………え?」

ティアス自身、どう反応しようか困つていると、どこからか別の声が飛んできた。

「姫様! また発作ですか? お部屋に……!」

クリーム色のショートカットの精霊だつた。しかしその精霊も、ティアスの顔を見るなり声を失つた。

「…………えーっと、何か?」

ティアスがおずおずと声をかけると、両者とも我に返つたらしく、少女はぱつとうつむくと無言で踵を返し、精霊はあわてて後を追つた。

「…………何なんだろ、一体」

早足で回廊を歩きながら、彼女はみずから精霊に尋ねた。

「ウィルトン。私は……何か言ったかな？」

その声が震えていることには、気付かないふりをして。その様子に痛々しく顔を曇らせた精霊は、一息ついて答えた。

「いいえ。私の記憶の限りは……。驚いてしまって、声が出なかつたようです」

「そう……」

それだけをつぶやいて、シルスはふいに口許を緩めた。そして目を閉じる。

元気で、いてくれた。生きていてくれた。私の大切な、たつた一人の。

涙で前が見えない。

「どうして？どうしてこんなことになつたの？私たちは、何も悪いことなんかしてないのに。」

ただ、ちいさな世界で静かに生きていただけなのに。

「田の前で気遣わしげに自分を見る人が額に手を触れたその瞬間、世界が…変わったような気がした。」

「……また、夢か」

宿題中に転寝うたたねしてしまつたらしい。問題は大して進んでおらず、いい加減本気にならないとやばいかもしれない。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。答えると、レージが入ってきた。

「何？」

「ん？なんか最近あんた、時々ぼーっとしてない？何かあったの？」

「…あのさレージ」

ふとティアスは、一番確認しやすいことだけは確認してみようと思つた。

「『シリス様』ってさ、……女の子なんだっけ？」

いきなりの問いに、レージは一瞬「は？」という顔をした。

「……ああ、そう聞くけどね」

「他に知つてることある？」

ティアスの意外に真剣な表情に首をかしげたレージだが、しばし唸つてから続けた。

「小さい、らしいよ。学校に行くか行かないか、ぐらいの歳つて聞いたことがある。あとは……そ、髪が長くて腰ぐらいまであるつて。これでいい？」

「うん。十分、ありがと」

途端にティアスの語調が変わったのは、確信が持てたからだ。自分が見た少女とおおまかな外見が一致するだけではない。王宮主催のパーティーで働くにいられる人間なんて知っている。彼女は侍女の類ではない。

恐らく、噂通りの王族の一員なのだろう。問題は、誰から枝分かれした先の人物なのか、という所だが。

(……それに)

あのときの、彼女の顔が時折目の前にチラつく。なぜ、彼女はティアスを見てあんなにも驚いていたのか。会場に通じる通路に人がいることはさして不思議でもない。それは、あの精霊にもいえることだった。驚愕、というべきか。あの表情。

(あの2人、……私を知ってる……いや)

ふと思ひ浮かんだ考えを、即座に否定した。いくら母親が元『ツイスト』だからって、まだ学生の娘の顔までそう知られているわけがない。現『ツイスト』のレージすら、彼女とは面識もない。

(それに)

フレアは、どこに行っていたのだろう。その後、しばらく探したが見つからなかつた母は、パーティー終盤になつてどこからかヒヨコツと現れた。「ごめんね、トヨレを探してて」なんて笑つていたが、トイレなんてティアスはとっくに捜索済みだつた。

そんな思考の海にはまりかけていた時。

「レージ、ティー、フォース、ちょっといらっしゃい」

思考回路が途切れたティアスは、レージと連れ立つて階下に降りた。嬉しそうなフレアの手には、何事か書かれた紙。

「お父さんからよ。来週帰るって」

仕事で各地を飛び回つていて、たまにしか帰つてこない父からの手紙だつた。彼の仕事が忙しくなつてから、母子は時折届く手紙を回し読みするのが恒例だつた。

「今度帰るときは、どんな土産持つてきてくれんだ?」

「最近はどう一も感覚が鈍ってきたようだから、あんまり期待しないほうがいいんじゃない？」

手紙だけは毎月ちゃんと寄せこすものの、幾月かごとにしか帰らない父は、最近は意味のわからないものを土産として持ち帰るようになっていた。前回は珍しい柄のティーカップのセットに、なぜか発育不良のキノコが添えてあった。

しばらくその話に花を咲かせた後、子供達がまた自室に引き上げると、フレアはシティに意味ありげな視線を送った。

「ちょっと、城までお使い頼めるかしら？」

「……構いませんが、ご報告に意味がありましょうか？ 彼女は出歩くことはできませんし、術をかけなおせとお返事されることは明らかです」

「ええ、そうね。でも、私は今ままだいいと思つのよ。噂からすると、これは私の想像だけど、あの子にはもうあまり時間がないわ。状況が変われば、もしかしたら……。私が自分で行つても、おそらく話がこじれるだけでしょう」

シティは複雑そうな顔をしながらも、ひとつ息をついた。

「……わかりました。では、今夜にでも

「そうね。頼むわ。……来週には、あの人の耳にも入れておかないとね」

「王、失礼いたします」  
「…メーチか。どうした？お前がここまで出向いてくるとは」  
ほんの少しだけ顔を上げた王は、また書類の山に視線を戻した。  
全て決済書類だ。

「あのパーティーの後、シルス様にお会いになりました？」  
「いや。すぐに部屋に戻ってしまったようだ。元々、ああいうものが好きな子ではないしな」  
「いえ……無理もありますまい。あのパーティーに、例の『姫』がいらしたようですから」

王の手が止まった。思わずといったふうに、顔を上げる。

「……本当か？」

「私の力不足でなければ、間違いございません」  
そうか、と呟いてから、彼はメーチを見据えた。

「 無事だった、ということだな」

「そのようです。現在の身元を探りましょうか？パーティーの参加者なら『ツイスト』の身内。難しいことでは」

「いや。こちらが調べれば、元老たちも感づく。かえつて『あの子』の身が危なくなる。今現在王家と無関係なら、それで通したほうがいい。あのジジイ連中に、要らぬ波風を立てられるのは御免こうむりたいからな」

最後の一文に、メーチは苦笑した。

「ご自分の補佐である元老たちに向かつて、随分な言い草ですね…。承知いたしました」

「ああ。『苦労だったな。持ち場に戻るなり休むなり、今日は自由にするがいい』

王の執務室を退室したメーチは、ふと空を見上げた。満天の星空が広がっている。

「……これは、私への罰のひとつのかしらね。あの子は……喜んでいるかしら？それとも

珍しく姿の見えなかつた精靈は、固い顔で戻つてくるなり、悪夢のよほな現実を知らせた。

「姫様、フレア様よりお使いが。どうやら、ティアス様の記憶が、部分的ながら戻つてきているらしさ」と

瞬間、いつものよほに氣だるげだつたシルスの顔色が変わつた。「術をかけ直せ！ そう應えただろうな？ なぜ、わざわざ私にそんなことを……！」

「シティにも、わかりかねる様子でした。ただ、「私がずっと願つていたことが叶うかもしれない」とだけ……」

「……？」

一瞬だけ、可愛らしい顔を歳相応にかしげたシルスだが、その報告は彼女にとつて、この「えなく恐ろしいものには違ひなかつた。

その様子を、じちらも複雑そつに見守つていたウイルトンが、静かに口を開いた。

「姫様、何を考えていらつしやつたのですか？ やはり あの時……？」

激昂状態だつたシルスの表情が、その言葉に落ち着いた。……寂しげに。

「あの時、あの子が言つていた夢。あれは、叶つたといえるのかな

……」

「姫様……」

おやとでたいな。

そう言つて笑つたティアスを、今でもはつきりと思ひ出すことができる。

もう自分の記憶の中にしかない、……遠い想い出。

主が遠い昔を回想していることは、容易に想像がついた。また、静かに口を開く。

「それは、私には何とも申し上げることはできません。けれど、ティアス様はきっとお幸せです。フレア様は、お母上が誰よりも信頼されていた方。姫様も、そうでしょう?」

「……そうだね」

つぶやくように答えてから、少々眼光を鋭くしたシルスは精霊に命じた。

「フレアとは、今後も直接会うな。あの能力があるとはいえ、元老たちの手のものは王宮内のどこにでもいる。あの子のことが、もしも露見したりしたら 私に元老たちを殺すようなことはさせんな その気迫は、まさしく王家に名を連ねる者にふさわしいものだつた。ウイルトンは、むしろ誇らしげに笑つた。

「 承知いたしました」

## 6 発覚（後書き）

続きは年明けになるかと思われます。

ティアスは、また夢の中にいた。

今度は、大きな建物の中。どこかで見たような造り。そのなかで、ティアスはやつぱり、あの少女と一緒にいた。

（……誰なの？ あなたは……）

何となくそう思つても、言葉が口から出てくることはなかつた。ティアスは草花で作つた首飾りをその少女と持ち、目の前のドアを開こうとしていた。この先に、大好きな人がいるはずだから。

けれど照れくさくて、肘でつつきあつたりしつつ、なかなか開くタイミングをつかめない。

思い切つて開いたのはティアスだった。しかし、その先を見ることを拒むかのように、ティアスの意識は急速に浮上した。

「おや…… わすがにテスト当日だけあつて、顔色がさえないね」顔を上げた先にいるのは、サンドイッチをつまんだレージだ。

「今日は父さんが帰つてくるんだから、出来ばえちゃんと報告しろよー。」

「……わかつてるよ。ビーセ、また『もつと勉強しろー』とか叱られるんだから」

あれから1週間が過ぎ、父が帰つてくる日が来た。そして幸か不幸か、日を同じくして、テストの中でもティアスが苦手とする歴史のテストが、待ち構えていたのだ。

「2人とも、早く支度しなさい。ティアスは、テスト当日に遅刻する気？」

「だーいじょうぶだよ。ティーは俺と違つて、5分で用意できんだからさ」

不毛な議論をさくつと断ち切つたフレアの常識的な意見も、フオ

一セットのからかいで勢い半減した。

朝食を済ませ、ティアスが珍しくトイレに立つと（いつもは、そんな暇はない）、背後に人の気配がした。振り返つてみると、フレアが神妙な表情で立つていた。

「……お母さん。どうしたの？」

「……」

母は無言で娘の額に指先をあてると、何事かつぶやいた。その呪文が何なのかを認識した次の瞬間、ティアスの頭は真っ白になつた。

「……アス、ティアス！」

「……あれ？」

気がつくと、力の抜けたティアスがフレアにもたれかかり、彼女は心配そうに娘をのぞきこんでいた。

「大丈夫？ テストだからって、無理しちゃダメよ？」

「え？ あ、うん、大丈夫。心配かけてごめんね」

子供たちが出払うと、後片付けをするフレアに近づいた者がいた。

「さつきかけたのは、忘却呪文ですね」

「シティ…見てたの？」

「行動が、少々不自然でしたので」

「あらあら、私もまだまだね。……まあ、あのまま放つておいても、部分的に戻つてくる記憶に混乱するだけでしょう」

シティは、そこで戸口に向けていた視線をフレアに向けた。

「フレア様。フレア様が狙つておられるることは一体なんなのです？ まさか、封印を完全に解かれるおつもりですか？ そんなことをすれば、ティアス様のお心は……」

「私は、シルスがたつた一人で、死ぬまで苦しみ続けるなんて嫌なんのよ。あの子はあの時から、セレスもティアスも失つたまま、心を閉ざしている。当然だわ。それだけの傷を受けたんだから」

「しかし」

「私だって、これが正しいと信じたいだけ。私はセレスを守れなかつた。だから、シルスは守りたいの」

それつきり、フレアは片づけを再開するためにその場を離れた。その様子を見つめるシティの表情には、哀愁が浮かんでいる。

さつきの忘却術が消したのは、おそらく「妙な夢を見た」事実だけだ。その夢の元になつた記憶は、ティアスの頭の中で、彼女自身気付かぬうちに蘇つてきている。それを止めないと云ふとは、『術』を解くということだ。今朝ではない、昔かけられた強力な忘却呪文を。

「……それで、姫君たちが幸せになれるといつなら、どうして今まで

「

## 8 #略語（用語集）

ほかの語句に比べるとちょっと難しかも。

「どうだつた？今日の生態学」

「んー、まあボチボチつてど」

「……嫌味？」

「なんで。聞いてきたのティーじゃねーか」

おどけて返すロイリーに、ティアスはサンディッシュを一口かじつた。

学年でトップともいえる記憶力をもつロイリーは、覚えればいいテストの出来はだいたい「ボチボチ」と言つておいて、とる点数はほぼ学年最高点だ。今日はずっと座学のテストが続いたが、歴史がよつやく終わつたのでティアスとしては一息つける。そして、例の「」とく2人は裏庭で談笑中なのであつた。

「じゃ、今度はこつちから質問な」

「何？」

「最近、なんか悩み事があんだろ」

ティアスは、思わず口を止めた。一応普段どおりにしているつもりだつたが、さすがに親友にはかなわないらしく。

「……なんかね、お母さんに隠し事されてるみたいでさ」

「おばさんが？ティーに？」

「確証とかはないよ。ただ……なんか、そういう感じがして」

「ふーん…ティーに気付かれるなんて、ユルイ隠し方だな」

「変などこでからかわないのでよーこつちは本気なんだからー」

言つてしまつてから気付いた。ロイリーは今、わざとふざけて答えたのだ。多分、あまり落ち込ませないために。

「まあ、何か隠してることしても、ティーのためを思つてのことだとは思つよ。おじさんもおばさんも、ほんとにティーを思つてくれると思つし。あんな人たちが親だつたらいいなつて、いつも思

うしな

「……せつにえば、ロイのお父さんとお母さんって……」

「ああ、そーいや言つてなかつたか」

ロイリーは食べ終えたランチボックスをしまうと、一息ついて口を開いた。

「王宮で働いてた。つてのは話したっけ?」

ティアスがうなずくと、ロイリーは微笑して続けた。

「まあ、オレは両親どつちも顔も何も覚えてねえから、これは聞いた話なんだけどな」

一息おいて、ロイリーの表情が心なしか締まつた。

「オレの父さんと母さんは、当時の王様の召使だつたそだ。オレが産まれる少し前、多分、まだ仕事に支障をきたすほどじやない時期だつたんだろうな。その王様は……いや、確か女王様だつたな。その人は、国外の外れまで休養に出かけたそだ。そして、運悪く盜賊に襲われたんだと。その女王様をかばつて父さんは死んで、母さんも……オレを産むとほぼ同時に死んじまつたらしいよ。

運がなかつたんだな、父さん。その事件、死者自体は少なくて、もう一人青年が犠牲になつたぐらいらしいし

語る彼女の顔はなにか世間話でも語るようで、しばしティアスは、言葉を返すことができなかつた。

しばらくして思考が追いつくと、だいたいの事情がわかつてきた。

「……それで、親戚の人に引き取られたってわけか」「正確に、親戚つてわけじやねーけどな」

「え?」

ロイリーは頭の後ろで手を組み、草原に寝そべつた。

「ティー、その事件のこと知らなかつたろ?教科書にも載つてねーし、授業でも教えねえ。なぜかその騒動は、事件のわりにはこぢんまりと終結させられてんだ。……ま、王家の誰かが死んだつてわけでもねえから、そう不自然でもないけど。親に親戚がいたかどうか

もオレは知らねーんだけど、今一緒に住んでる親代わりは、その友人なんだってさ」「ふーん…。ロイも、なかなか物語的な人生送ってるんだね

相槌をうつたあとで、ふとした疑問が浮かんできた。

「……あれ？ 前の王様って女王様なんだっけ？」

ロイリーは、少し呆れたようにティアスを見やつた。それくらい覚えておけ、と言いたげだ。

「まあ、教科書にはろくに載つてねえから、ティーが覚えてなくても無理ねーか。今の王様の姉で、血筋としては違和感はないな。因習にのつとつた妥当な即位だ。在位は10年足らずで、一時期なんか体調を崩したとかで引っ込んでたようだけど、最後は病気で急死。確かに、歴史として覚えるようなことは大してやってねえな」さすがに亡き両親が仕えていたらしい人のことで、結構調べているようだ。

「この事は、あんま口外しないでくれよ。オレ、こんなことで注目集めたくねーしさ」

ちらりとティアスに目をやつたロイリーはどこか寂しそうで、ティアスはほんの一瞬、言葉に詰まつた。しかし、すぐにいつもの「親友」の顔に戻つた。

「決まつてるじゃん。ロイは私の親友なんだから。……ありがとう、話してくれて」

その言葉に微笑んだロイリーに、話題をいつもの雑談に戻しながらティアスもランチボックスをしまつた。

## 8 故話（後書き）

いつもと本題出ました。わかりやすい伏線で読みやすいといひ  
べ。

その夜。子供たち（というかティアスとフォーセット）の学校でのテストの話や、レージの力自慢を苦笑交じりに聞いていた父、それを少々憮然とした顔で眺めていた母を残し、すでに家の中は寝静まっていた。

ティアスが喉の渴きのために田を覚まし、寝室を出たのはおやすみを言つたしばらく後だった。

会談を静かに下りていると、部屋の薄明かりが見えた。両親はまだ起きているようだ。

「……やつぱり、当初の懸案事項けんあんが当たつたか」

「それで、私はシティ達を説得して、あの子を戻してあげたいと思っているの」

「あの時言つたように、結論はお前に任せると。シティの主張どおり記憶を封じ込めなおすか、お前の望みどおり時機をみて術を完全に解除するか。ティアスも、事実を聞いてもいいくらいの歳にはなつたと思つし、それほど弱く育つてもいない。……あの時の、お前の見通し通りじゃないか」

何の話なのか、さっぱりわからない。

不意に、コップを机に置く音がした。

「……じゃあ、相談する必要もなかつたわね」

「いざれこうなる可能性は、10年前から多分にあつたからな。お前が決めたことだ。責める気はないさ。ティアスを、実の娘として育てるってな」

（ !? ）

頭の中が真っ白になつた。視界がぐらついた。

今、なんて言つた？

「へえー、前とは飾り付けをちょっと変えてるんだね」

「まあ、さすがに同じじや味気ないでしょ。なんとなく女の子っぽくなつてゐるじやん。今度は王女様だもんね」

田の前の光景に見入つてゐる妹に、レージが楽しそうに応じる。

今日は、ヘルド王子の妹リズ王女の誕生パーティーなのだ。父はあのあと間もなくまた仕事に出かけ、面子は前回と同じだつた。違うのは会場の装飾と、人々の衣装ぐらいだ。

王家の挨拶が終わると、間もなくティアスは「トイレ」と短く言ひ置いて、会場を離れた。しばらくは「同じ用件」の人とすれ違つたりしたが、やがていなくなり、会場の明かりもあまり届かなくなつた。

会場を広く見渡せる、しかし田立たないバルコニーになつた所で、ティアスは彼女を見つけた。 黒い癖のある髪を後ろでまとめ、

淡い黄色のドレスに身を包んだシルスは、つまらなそうにパーティー会場を見下ろしていた。その黒髪がいつかの夢の中の少女に重なつたのは、一瞬のことだつた。

意を決して彼女に近づく。シルスは気配に気付いたらしく、ティアスに気付くと、また驚きと、今度は戸惑いのような表情を浮かべた。すぐさま踵を返そうとする彼女に、続けて声をかける。

「あの、待つて……！」

思わず右手首をつかんでしまつたが、彼女は振り向こうともしなかつた。

「何の用だ」

「あの。この前も、お会いしましたよね？すく驚いてらつしゃいませんでした？」

「あんなところに人がいれば、誰だつて驚くだろ。……離せ」

声が震えているような気がしたが、ティアスがそれを言つまえに、別の声が割つて入つた。

「手を離していただけませんか？」

あの時と同じ精靈だつた。確か、ウイルトンとかいつたか。

「あの時のことでおわかりかと思いますが、姫様はお身体が弱いん

です。何かある前に、お部屋にお連れしたいのですが

整然と語っているようだが、精靈は始終ティアスのほうを向こうとしない。シルスはといえば、やつぱり口を開かず、まるで彫像のようにに固まっていた。

手を緩めながら、ティアスは静かに問いかけた。

「……あなたは、誰なんですか」

シルスはほんの少しだけ振り向いた。なにかを堪えているような、怒っているような、形容しがたい表情で。

「……ただの、死に損ないだ」

そして、今度こそティアスに背を向け、ゆっくりと去っていった。

「……よく感情を抑えたわね、あの子」

シルスの背を物陰から見送りながら、フレアはシティに耳打ちした。

「よく覚えておいでですね、ここ」の構造を

「そりや、昔は始終ここにいたもの。それより、あの子がここまで見に来ていたのが驚きじゃない？ やつぱり そうすべきだわ」シティが、一つ息をついた。

「それにしても、早々に姿を隠してどうされるのかと思えば……。

前回のパーティーのときも、こうでしたでしょ？」

これには、フレアも苦笑した。

「だって、王が私の顔を覚えている可能性は結構あるもの。彼があの子たちをどうこうするとは思いたいけど、危険を避けるに越したことはないわ。じゃあ、戻りましょうか。会場へ」

その会話を聞くことができた人間は、その場にはいなかつた。

## 9 再会（後書き）

んー・・・当初の予定よつおしてこる・・・。なんか1-5話べりーまでいっぢやいわうな雰囲気です。

薄暗い建物の中をうねうねしながら、ティアスはさつきのことを反芻していた。

あまりに腑に落ちなくて、パーティーに戻る気にはなれず、かといつて、どこに行きたいのかもはつきりせず、ただ何となく、足を動かしていた。

気付けば、まったく見覚えのない一角に入り込んでしまっていた。立ち止まつたのは、声が聞こえてきたからだ。しかも、ついせつ

き聞いたような声。 間違いない、シルスの声だった。

「会場にいらっしゃらなくて、よろしのですか？」

会話の相手は女性らしい。ティアスは声の出所を探した。

「私ひとり消えたところで、痛くも痒くもないだろう。王にとつても、あの客達にとつても」

見つけた。あのシルスが、女性に詰め寄っている。ベージュの長い髪を一部だけ後頭部でまとめた、物静かそうな淑女然とした人だ。

「というより、単に私を殺しそこねただけのお前に心配され筋合いはない。……10年も前に、すでに見捨てていたくせに」

女性が、少し笑つたようだつた。自嘲とも苦笑ともつかない笑みを浮かべ、しかし口を開くことはなかつた。

「それで？ わざわざここまでいらっしゃった理由は、そのことで私を責めることではないのでしょうか？」

「わかりきつた事を聞くな」

シルスが、吐き捨てるよつに答えた。

「私がこんなところに来る理由なんて、お前なら考えるまでもないだろう。それも、城内の者がパーティーのために出払うこの日に来たことでわかつたはずだ。今日こそ教えてもらつぞ。……母様を殺した奴の正体を」

ティアスは声を出すことを危つへじられた。お母さんを殺された？というか、お母さんって誰？

「……お教えしたところで、どうなりましょ？まあ、私がすでにその犯人を突き止めていると思つまでに、信頼して頂けてることには感謝しますが」

「はぐらかすな。でなければ、そんな無能な術師をあのひとが、王の専属にしているわけがない」

「しかし、あなたがその後にされることはわかりきつておりますし、王は復讐など望んでおられません。確か、当時も申し上げたと思いますが？」

シルスの顔に、赤みがさしたような気がした。

「……ああ、だから10年間口をつぐんできた。しかし、それを知らなければ私は死ぬに死ねないんだ。この意味がわかるだろう。ただの心境の変化で、問いつめにきた訳じやない。私には、知る権利があるはずだ。あの幸せな生活を壊した元凶をな」

言つている間にも、シルスの興奮は増していくようで、怒りと苦しみがないまぜになつたような表情で声を荒げる様子は、少し大人びてはいるものの、「1人の少女」の顔だった。

これ以上、聞いてはいけない。

そう思つた。さつきの話は、恐らく彼女の聖域。私のような、無関係な第三者が聞いてしまつていしたものではない。

(……？無関係…？)

自分で思つたことになぜか違和感を感じながら、ティアスは2人に気付かれないようにそこを離れた。そして、なんとか2人が見えない位置まで行つたとき、別の声がティアスを呼んだ。

「ティー、どこ行つてたの？もうパーティー終わるよ？」

呆れ顔のレージに数瞬だけ言葉が詰まつたが、なんとか返す。

「あ、うん……ちょっと。もう戻るよ」

怪訝そうなレージが歩き出すのに従つて歩きながら、ティアスは新たな違和感を咀嚼<sup>そしゃく</sup>していた。

会場に戻るのにかかった時間は、あの2人を見つけるまでにかかった時間より、かなり短かった気がした。

## 10 見つけた2人（後書き）

間が空いた割に、同じ日の話だったという・・・。  
あと5話・・・ぐらいで終わります。ひたすら種明かし始まります。

## 1.1 解けた封印（前書き）

読み込むと進むです。

リビングに入ると、フレアひとりだけが椅子に座っていた。その時を狙つたのだから、当然といえば当然だ。

「どうしたの？」

気付いたフレアに、表情を緩められなじまざと。 「……ちよつといい？」

「いいわよ」

是の返事に、ティアスも向かいの椅子に腰を下ろす。まるで、娘の「話」がなんなのか、わかっているような顔でティアスを見る。

「前置きなしで聞くよ。私は 」

覚悟を決め、一気に言い切る。

「私は、お父さんとお母さんの本当の娘じゃないよね？」

強張つた表情の娘にわずかに目を細めたフレアは、あつせりと答えた。

「そうよ、お母さんとティアスは血が繋がってないわ。にしても、自身ありげなのね」

ティアスはわずかに逡巡したが、口を開いた。

「……お母さんが夜中に、お父さんと話してゐるの聞いたやつて。私を実の娘として育てる、つて……」

「……」

数瞬だけ言葉を失つたようだったフレアだが、突然笑い出した。

「なんだ、あれ聞いてたの？ 最近なんか様子がおかしいと思つてたけど、そういう事だったのね」

「話、そらそりとしてる？……誰なの？私のお父さんとお母さんつて」

「それは、私が教えるべきことじやないわ」

先程とは打つて変わって真剣な顔になつたフレアが席を立つた。

いや、もうひとつの変化にティアスは気付いた。フレアの一人称。いつも「お母さん」としていたフレアが、今「私」と自分を表した。

「……どうごうこと?」

「私の口から、話すべきことじやないのよ」

言いながら、背後の引き出しを開けた彼女は、ティアスが知らない顔をしていた。そして、そこに入っているものを見つめながら、フレアは静かに言った。

「あなたが、思い出すべきことなのよ」

彼女が取り出したのは、朱色の玉。そう、前のパーティーのとき、ティアスがちらりと見かけたあれだ。フレアは、まっすぐにティアスを見つめて、続ける。

「 約束してちようだい。全てを思い出しても、ちゃんと受け止める…逃げないって。これから見せることが、どんなことでも。約束してくれないと、私はお父さんにもシティ達にも、顔向けできないわ」

ティアスがうなずくと、嬉しそうにわざわざ微笑んだフレアは玉に掌てのひらをあて、何事か囁くと、最後につぶやいた。

「封じられし者を 開放する」

その玉が淡い光を放った、瞬間。

何かが、ものすごい勢いでティアスの中に流れ込んできた。

映像、色、声、感情……。 それは、記憶だった。

ぴくっと反応したウイルトンに、シルスは怪訝な視線を向けた。

「どうした?」

「……この気配 いや、そんなはずは……」

「何だ? この部屋を訪れる者などそうこまい。まさか、あの子が来るわけもないしな」

苦笑しながら扉を開けると、信じられない光景があった。

「……どうして……いや　どうやってここまで……！？」

「　シッ！大声出したら怪しまれるでしょ？」

ティアスは、口に指を当てた。用心深くあたりを見回し、そらに声を潜める。

「とりあえず、部屋に入ろう。誰かに見られたりしたら面倒だし」「……どうやって城門を越えた？」

尋ねつつ、シルスは混乱していることを自覚した。扉を閉め、ティアスが微笑む。変わらない部屋。少し狭く感じるのは、自分が成長したせいだろう。

「シティを借りたんだよ。知ってるでしょ？シティの力」

突如ティアスの脇に現れたその精靈に、シルスは嘆息した。これは、確定的だ。かすれた声を搾り出す。

「……ティアス……やはり」

「そう。お母さんが思い出せてくれたの。……姉様」

次の瞬間、別の精靈が現れた。朱色の髪を腰までたらした、懐かしい姿。

「……ゼイル　」

もう一度と、その精靈と会つことはないと思っていた。ウィルトンと同じように、出生と同時にティアスに与えられた精靈。そして、フレアが長年、ティアスの記憶とともに封印してきた精靈でもあった王家の人物である証。

「でも、なぜです？私達は、ティアス様の記憶が戻されることはないと、覚悟しておりましたのに」

ウィルトンの言葉は、そのままシルスの心境だった。……そう。なぜ今になつて。

ティアスは、手近にあつた懐かしい椅子に触れた。

「お母さんは、忘れられなかつたんだよ。母様のことも、姉様のことも。傷を負つたのは私達だけじゃない。10年前のあのとき、もう決めてたそうだよ。私を育てて、事実を受け止められるくらい大

きくなつたら、記憶を全部戻すつて。お父さんを説き伏せて、待つてたんだつて」

そこでティアスは、椅子に落としていた視線をシルスに向かた。ここからは、自分が聞く番だ。

「私も、聞きたいことがあるの。姉様、どうして……」

その先を予想して、シルスは顔をゆがめた。それこそ、自分とウイルトン以外は誰も知らない、王宮の闇。……死んだほうがましだとさえ思った、日々。

「<sup>あのとき</sup>十年前と同じ姿なの？」

## 1.1 解けた封印（後書き）

ここから、延々種明かしタイムです。  
飽きられないか心配ですが・・・お付き合い下されば嬉しいです。

## 12 #囲碁 (将棋)

ひたすら囲碁である。

「大丈夫？」

全ての記憶を流し込まれたティアスを前に、フレアは心配げに尋ねた。

「……」

しばらく黙り込んでいたティアスだが、不意に口を開いた。

「……お母さんは」

「ん？」

ティアスは、フレアの顔を見ることがなく続けた。

「父様を……知ってるんだよね？」

流れ込んできたのは、幼い日々の記憶。ただ、その中のどこにも、

『父』のことはなかつた。フレアは一つ息をついた答えた。

「ええ。の人とセレスティが会うことを、私が手助けしたからね。あのふたりは、本当に愛しあっていた。……今となつては、誰も知らないことだけど

「誰も知らないって、どうして？父様って、いつたい誰なの？それに、お母さんはどうして、母様とあんなに親しかつたの？母様は、あの時はまだ……」

まだ本調子ではないティアスを家の外に連れて行き、フレアは壁に背中を預けて続けた。

「そうだね、順を追つて話そうか。そう　あの当時、セレスティは一国の女王だつた。その彼女と私が親しくなつた理由は、私が彼女に仕える立場だつたから」

「仕える　？」

「そう」

フレアは、少し切なそうな笑顔をティアスに向けた。

「私が昔、『ツイスト』だつた事は知つてゐるわね？そして、代々の

王家の護衛は、その『ツイスト』の中から選ばれてきた

「……ああ、そういうば」

前に、そんな話をレージから聞いたような気がする。

「でもお母さん、今まで王様の護衛やつてたなんて、全然

「彼女のことば、『あの口』から、おおっぴらに話さないことにしたのよ。とにかく、私は彼女を守るといつ役目を果たしていた。1

6年前までの数年間ね」

「16年前……つまり」

「そう　　彼女が、あなた達を身ごもつたとわかるまで」

「……」

しばし沈黙したティアスが再び口を開いたとき、その顔には苦惱にも似た表情が浮かんでいた。

「……父様は、もう……」

記憶が戻った時点で、予想はしていた。フレアは目を閉じた。

「死んだわ。セレステイの懷妊がわかつた時には、もう彼はこの世にいなかつた。彼は、元々王宮とはなんの関係もない人だつたの。

……王位を継いで数年たつた頃、セレステイは長期の休養に出かけた。国のはずれの小さな村にね。お忍びで、同行したのは数人の護衛と召使だけだつたわ。そこで働いていた青年が、あなた達の父親。顔を合わせているうちに、2人はすっかり意気投合してね。彼女がとても嬉しそうに笑うし、私も彼を気に入つたから、周囲に気をつけながら仲立ちをしたりしたけど、……急いで王宮に戻つて懷妊がわかつた時には、さすがに驚いたわ

「急いで？」

ティアスの言葉を合図にするよつて、フレアの眼差しが鋭くなつた。

「もう少しでそこを去るという頃に、宿が盗賊に襲われたのよ」

「……」

何かが引っかかる気がして、ティアスは記憶を探つた。

16年前、国はずれまででかけた当時の王。そこで盗賊に襲われ、王を守つて数人が死んだ。それは、王仕えの召使と。

「…まさか、その死者のひとりが、…父様?」

「どうかしたの?」

ティアスは、ロイリーに聞いたあの話をした。フレアの表情にも動搖が浮かぶ。

「そう、そうね。あの時は数人の死者が出て、そのひとりが彼だつた。私はセレスを守ることに手一杯で、彼を守りきれなかつたの」

ティアスは眉根を寄せた。確かに、その事件は伏せられたらしいとロイリーは言つていた。

「まあ、大々的に公表したい事ではなかつたけど、彼の存在の理由のひとつね。盗賊の報に、セレスティは真つ先に彼を心配し、様子を見に行こうとしたから。王宮関係以外の死者が彼ひとりだつたら、いろいろ噂をたてられないように隠蔽したの」

「……そんなの…」

「大急ぎで王宮に戻つた人間から事情を聞いた、元老たちが決めたのよ。王家の権威が下がつたら、自分たちが色々やりにくいくらいだつたから。ティアスは、さつきの「16年前まで」の言葉の意味がやつとわかつた。

「それが原因で、お母さんは護衛をやめたの?」

再びティアスに向けられたフレアの表情は、力が抜けたような笑顔だつた。

「そう。まあ、守るべき主君にどこの馬の骨ともわからない男を近づけて、懷妊までさせちゃつたら、それは駄目よね。彼女は未婚だつたし。あの時はまだレージも小さかつたから、育児に専念しろと言われたわ。そのせいで、父さんは仕事の制約がなくなつて、気楽にあちこち行くよになつたんだけどね」

しかし、彼女は思い出したように付け加えたのだった。  
「でも、後悔したことはないわ。お役目として失格でも、私は彼女  
が大事だつたから」

12 **言語り（後書き）**

長ー・・・。ちなみに次も長いです。

### 13 明かされたる謎（前書き）

サブタイトルがぬつひや今更や……（汗）いや、ほんとに都える  
の苦手です。

「……そう。それが、あの事件の真相か……」

まったく外見年齢の違つふたりの少女が、真剣な顔で向かい合つていた。先に目を逸らし、口を開いたのはシルスだった。

「予想はついていた。母様が未婚だったことと、父様についての記述がどこにもなかつたから。あの元老たちが、「女王が父親もわからぬ子供を産んだ」なんて、公表するわけがない。……フレアは、本当に母様を大事に思つてくれていたのね」

「母様も頼つてたと思うよ。だから、シティに気配を消す能力まで<sup>ちから</sup>教えてお母さんが城内に入りやすいようにしたり」

沈黙がおりたところで、ティアスが再度、姉を見据えた。

「今度はこっちが聞く番だよ。どうして、あの事件前と同じ姿なの? どんな術がかかつて……」

生を受けてから、ティアスとシルスは城門に近づくことさえ許されず、王宮の奥で軟禁状態で育てられた。理由はわからなかつたが、ふたりは幸せだった。小さな少女にとつては十分な行動範囲もあり、勉強も、草花を愛でることも、小鳥と戯れることもできた。忙しかつた母は、それでも双子の娘たちを本当に可愛がつた。何も望むものない、幸せな生活。

それは、唐突に崩れ去つた。

10年前のあの日。ふたりは一生懸命つくつた首飾りをプレゼントしようと、母の部屋のドアを開き、見てしまつた。身体の至る所から血を流し、倒れている母の姿を。そして、それを看取つたという母の親友の姿を。

フレアは母の死と、彼女にふたりを連れ出すよう頼まれたことだ

けを手短に告げ、何がなんだかわからなくなっているふたりを連れて城門まで急いだ。このままここにいては、どうなるかわからない。

王の死に混乱した王宮から抜け出すことは、フレアの魔力やシティの能力を駆使すれば容易だった。しかし、フレアもよほど動搖していたのだろう、シルスと途中ではぐれたことに気付くのが遅れた。

そして、最終的に元老たちに捕まつたことが、シルスの決定的な不運だった。

城から逃れたフレアは、すでに心を決めていた。家に帰りついた彼女は、泣きじゃくるティアスを寝かしつけ、夫の協力を得て術をかけた。記憶をあやつり、過去を封印し、『自分の娘』としての生を埋め込んだ。

ティアスが聞きたいのは、その後の話だった。王宮で、いつたい何があつたのか。

「呪い、よ」

無感動なシルスの答えに、ティアスは顔をしかめた。

「それは想像つくけど……身体の成長を止める呪いなんて、あつたかな？」

治癒系統も攻撃系統も、主だった術や呪いはおおかた学校で習う。が、ティアスには覚えがなかつた。

「学校で習つていらつしやるかどうかは、わかりません。学生にはまず使えないほど、魔力を要する呪いです。元々、別の目的で使われるのですが」

ウイルトンの説明に続き、シルスがつぶやくように答えを明かした。

「……『死の呪い』」

「『死の呪い』を受けて、助かったのですか？」

ゼイルが、思わずといった風に割つてはいる。答えたのはウイルトンだった。

「『死の呪い』は、その魔力の強さによって可否が決まります。姫様の内なる魔力は、現在の王族では最高ともいえるほどです。術者の力不足だったのか、姫様を侮つてはいたのか……術は失敗しました。しかし、失敗してなお、影響のある術でした」

「『死の呪い』が失敗した場合……」

ゼイルのつぶやきに、シルスが答える。

「その余波は、かけられた者の『何か』を壊す。それは身体の一部だつたり、感覚だつたり。私の場合、それは『身体の成長機能』だつた」

沈黙がおりた。やがて、ゼイルが声を搾り出す。

「……では、シルス様のお体は、一生そのままなのですか？」

「それだけではありません」

答えておいて、ウイルトンがティアスに向き直つた。

「以前、姫様は発作を起こされました。覚えておいでですか？」

「ああ、眠つてたのに突然……」

「呪いが、身体を蝕んでいる、という事ですか？」

眼光を強めたゼイルに、シルスが一息ついて応じた。

「ゼイルは、変わらず鋭いな。そう。私の命は、もう長くない。呪いを受けて、もう10年。だから、私は死ぬ前に犯人を突き止め、魔力をすべて使って使つても殺す」

「駄目」

瞬間にティアスは口を挟んだ。禁止というより、拒絶の響きで。

幼い姉の肩をつかむ。

「命は大事にしなきや。姉様」

「どうせ、私はもうすぐ死ぬ。だったら」

「それでも」

一息ついて、ティアスは続けた。

「死んじやだめなんだよ。母様のために。 そして、母様を命が

けで守つた人たちのために」

それは、シルスの知らない、ティアスの親友の話。

「私の親友は、昔、母様に仕えてた人たちの子供なの」

彼らは、ティアスたちの母を守るために死んだ。そして彼女は、

ティアスたちのことを親友に託して亡くなつた。だから。

「自分から、死ぬようなことなんて、駄目」

「……」

その時 別の声が響いた。

「やはり、お戻りでしたか」

### 13 明かされた謎（後書き）

はい、やっと過去編終了です。あー長かった。とりあえず1話2000字を越えないように書いてるんですが、元の文章より伸びる伸びる。これでもあちこち削ってるのになあ（汗）

いつの間にか部屋に入つてきていったその人物に、ふたりの姫はそれぞれの反応をした。

「お前……！」

「……『メーチ・ローレイ』？」

すぐさま憎々しい視線を送るシルスとは対照的に、ティアスは恐る恐る、といった体でその名を呼んだ。名前は知っていたが、ティアス自身に彼女と関わった記憶はない。

現在の王の父であつた先々代の王にその素質を見出され、ずっと、王家にのみ仕える術師としてその名を知られてきた女性だった。「やはり、戻っていたのですね。王家とは違つ氣配を感じたので、来てみたのですが」

「ティアスは王族だ」

さつきとは打つて変わつた低音の聲音で、シルスが返す。

「まぎれもない王の子だ。おまえたちが、勝手に傍流にしただけだ」

「私達が……というより、あの強欲な元老たちが、ですね」

間接的に、そして簡単に、メーチは前言撤回した。そして、哀愁のようないもんを浮かべた瞳をティアスに向ける。

「本当に王宮から追放されるべきは、あなた方ではなく、あの者たちでしょうにね……」

「我が主を、抹殺に来られたのですか？メーチ様」

ゼイルが、警戒心をあらわにした声を出した。この女性がこの部屋までくる理由なんて、それ以外には考え付かなかつた。

ずっと、王家と国のことだけを考えて生きてきた女性だ。

「申し上げましたように、ティアス様のお戻りを確認するためですよ。予見はしておりましたから、いつもよつこの周辺の護衛は薄くしておりましたが」

シルスが、安堵とも呆然ともつかないため息をついた。

「……いつから予期していたんだ？」

「つい数日前ですよ。このくらいの動きは予知できませんと、この国を背負う方の補佐などできません。……しかし、あなた方親子には狂わされ通しですね。元々、あなた方の誕生そのものも歯車の狂いでしたが、先代はあの傷で召喚の術など使われるし、その友人は10年もの間、私の探索を欺かれましたし。私も、老いてきたとう事でしょうか」

物静かなことで知られる彼女の饒舌ぶりに違和感を抱きながらも眉根を寄せて聞いていたシルスが、言葉の途中から顔色を変えた。

「姫様？」というウイルトンの言葉も耳に入っていない。

「……おまえだつたのか？」

その台詞を同時にシルスの顔に怒りが浮かんだとき、ウイルトンもその意味に気付いた。そして ゼイルも。

「おまえだつたのか！？」

シルスが声を荒げたときには、メーチ自身もシルスの異変に気付いたらしかった。しかし彼女が動搖をみせたのは一瞬で、すぐに、元の穏やかな表情に戻った。

ひとりだけ事態についていけないティアスに説明するように、シルスは言葉を続けた。

「答える。おまえだつたんだな。

母様を殺したのは」

「え！？」

驚いたのはティアス一人だった。

「……考えてみれば、あの事実そのものが、お前がやつたという根拠のひとつだな。誰もが認める術と予知の腕を持つお前が、『王の暗殺』とそれが引き起こす混乱を、予知できなかつた訳がない。そして、お前はあのとき母様のところに来なかつた。そのお前が、厳重な保護呪文に守られたあの部屋で殺された母様の傷の様子を知つていたはずがない。母様の遺体を処理し、『王の病死』を広めたの

は叔父様 あの王だ

シルスの糾弾を黙つて聞いていたメーチは、やはり穏やかな顔で口を開いた。どこか嬉しそうにすら見えたのは、ティアスの気のせいだつたのだろうか。

「……ええ、その通りです。あのとき、いつになく興奮していた私のかわりに、あの方がすべての采配をとられました」

あつさりと白状され、焦つたのは姫と、その精霊たちだった。

「……何故ですか！？あの方は姫様たちの存在をちゃんと隠し、王位継承の権利も、返上されていたのに！」

ウイルトンの声は上ずつていた。そう 彼女がセレステイを殺すとしたら、それしか理由がなかつたのだ。

それには答えず、メーチはふたりの姫に目を向けた。

「あなた方さえお生まれにならなければ、あんなことは、考えもしませんでした」

ゆつくりと目を閉じた彼女は、寂しげながら、穏やかな表情のままだつた。

先々代の王に目をかけられ、メーチが国一の術師になるのに、そう時間はかからなかつた。

その王が亡くなり、王女セレスティが女王として即位しても、彼女と王の関係は変わらなかつた。

変わつたのは、彼女が非公式に双子の娘を出産してからだつた。

王の懷刀にもなつっていたメーチの言葉を、セレスティは拒むようになつた。彼女の意思ではない、ある取引のために。

姫の立場が弱かつたのだ。王位継承の権利を生まれたときに返上させられた王女たちは、身を守ることも公にはできなかつた。そして、元老たちはそこを突いた。姫を守る代わりに、元老の権力を増やせ、と。

「……母様が、あいつらと取引を」

シルスは、半ば呆然としていた。メーチの顔が、初めてゆがんだ。

「あの方が王であるかぎり、誰が元老になろうと不安がつきまとい

ます。しかし、王位の交代を促せるような事実は他になかった。」

「……いえ、見ていられなかつたのです。だから

「……私に、『死の呪い』をかけたのもお前か？」

頷いたメーチに、シルスはただ沈黙を返すことしかできなかつた。

## 14 真相（後書き）

か、かつてない長さ・・・！これでも大幅に削ったのに（汗）  
穴ボコな話だと承知の上で始めたけど、こうして書き直してみたら  
本当にボコボコだったというオチ？幼かつたなあ自分。  
次でラストです。

「叔父様 王は、あなたが犯人だと？」

ティアスの問いに、メーチは頷いた。

「お気づきでしょうね。あの事態を予期しなかつたことと、あの時の私の狼狽ぶりを考えれば、答えは出ます」

「……なのに、何の罰も与えず、城に置いてきたのか？母様は実の姉だらう！」

「この国のために、でしょうね。王が殺されたなどと、広まれば王宮は疑心暗鬼に襲われます。セレステイ様はそんなことは望まれなかつたでしよう」

ゼイルが、静かな声で答えた。付け加えるように、メーチが続ける。

「罰、だと思います。私の罪を知るの方に仕え、殺そうとしたシリス様の顔を見ながら、この国のために死くこと。……命死きるまで。それが、私の償いです」

「……」

それまでじつと聞いていたティアスが、これ見よがしなため息をついた。

「姫様……？」

「ティアス？」

「……ごめんなさい」

その言葉が誰に向けられたものか、一瞬全員が首をひねった。

「母様は父様を愛してたから、私達を産みたがつた。でも、それはあなたにとつては困ることだつたんだね。私は母様が大好きだし、あなたを赦すことはできないかもしない。……けど、母様も王として、譲っちゃいけないものを譲つてしまつた。そこは、娘として謝ります」

「……ティアス様」

しばし呆然としたメーチが、シルスに目を向けてみると、彼女は唇を引き結んでいた。苦しそうな瞳とかすかに。

責められ、憎悪されるとばかり思つていたのに。

「……あなた方は、ほんとうに王家の血を継ぐ方々ですね」このふたりは、王家の<sup>ひと</sup>人間として育てられていない。けれど、ちゃんと広く国を見渡せる目を持っている。まさしく、あの強かつた女性の子だ。

メーチが引き取ると、シルスは帰ろうとする妹を引き止めた。

「ひとつ聞いてもいい？」

「なに？ 姉様」

シルスはひとつ息を<sup>ひと</sup>おいて尋ねた。

「あの時いつてた夢、叶つたと思つ？」

ティアスは『あの時』の意味をはかりかねて考え込んでいたが、思い出したのか、「ああ」と小さくつぶやいた。

それは、まだふたりが何も知らず、王宮で暮らしていたとき。シルスは、妹に聞いたことがあった。

ティアスには、ゆめつてある？

ティアスは少し考え込んだが、笑顔で答えた。

うーん……かあさまとねえさまと、ザーツといつやつて、いつしょにいられたらしいな。

そして、シルスが相槌を打つまえに、思い出したように付け加えた。

あ、でも、もしかなうなら……。  
なに？

『おそと』にでたいな、ねえさまといつしょに。

そして、照れくさそうに続けた。

どうして『おそと』にでちゃいけないのか、わからないけど。いつか、かあさまとねえさまと、『おそと』をみてみたい。

「叶つたと思う？」

「そうだなあ、としばし考えたティアスは、なにやら決意したような顔で。

「これから叶えればいいよ」

はつとしたシルスに、ティアスは続けた。

「私、王宮に入るよ。母様が生きた王宮に戻つて、姉様を守れる仕事をする。うちはレー・ジが『ツイスト』だから、他の家よりよくわかるしね。姉様が元気なうちに、自分の力でここに戻つてくるから。待つてて」

「……ティアス……」

笑うティアス。こんな光景を、何度も夢に見た。自分と同じ年齢のままの妹を。

けれど、今ここにいるティアスは、成長した姿で笑つている。記憶の中と、寸分違わない笑顔で。

（……死ねなく、なつてしまつた）

頬を流れる涙を感じながら、シルスは独りごちた。

大切な、たつたひとりの妹が、戻つてくれると言った。あの頃と同じ笑顔をみせてくれた。これでは、生を諦められるはずがない。

「ティアスー！早く起きないと、また遅刻するわよー！」

翌朝、いつもと変わらないフレアの声で、ティアスは跳ね起きた。

あの事件は、結局公表しないことで落ち着いた。母ならそう願うだろうと、フレアたちとも相談した結果だった。

シルスは相変わらずの軟禁生活だが、メーチの術で、命数はかなりのびたらしく（術の効果を完全に消すことはさすがに不可能だそ

うだ。『死の呪い』は甘くない）。ティアスも、将来を見越せる猶予期間が増えたし、なによりメーチの協力で、姉妹が会うことは以前より難しくなくなる。

それでも、メーチの罪を忘れる事はできないけれど。

ティアスにとって、大切な当たり前の一日が始まる。これからも、ずっと続していく日々が。

## 15 落着（後書き）

とつあえず1-5話で終わりました。ところが終わりました。  
ものすごくふわふわしてゐる（つまり地に足着いてない）話だといふ  
ことは自覚します。お付き合ひ下さった貴重な方、ご苦労様でし  
た（汗）

少しでも「面白」とか思つてもうえたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0803j/>

---

And I still want

2010年10月8日14時39分発行